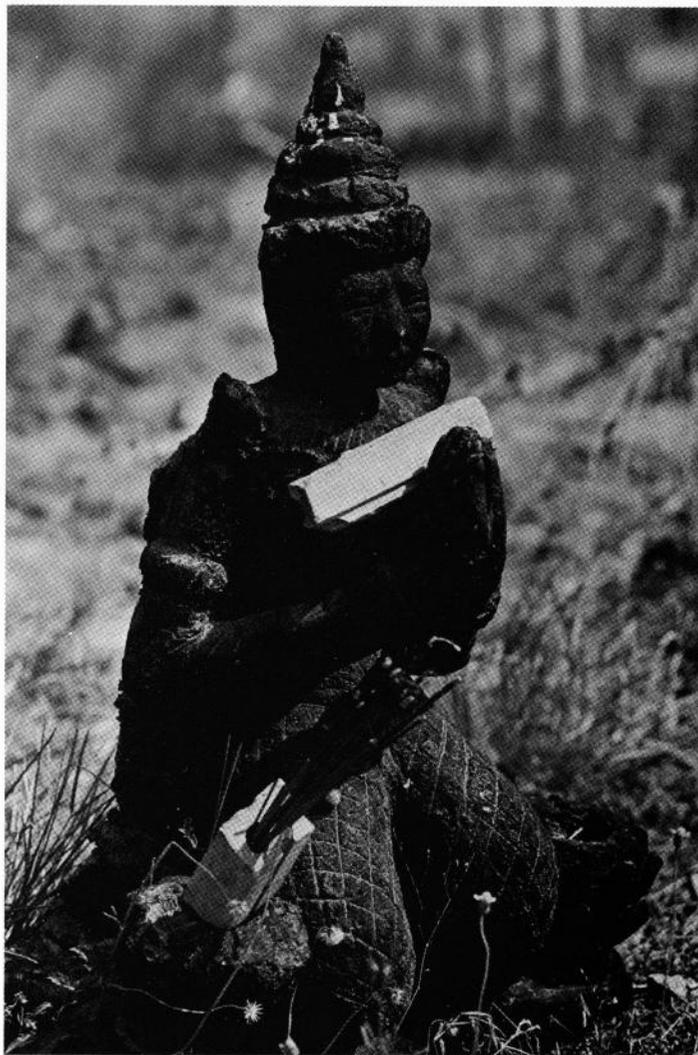


難民救援情報誌

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

— 試 行 錯 誤 —



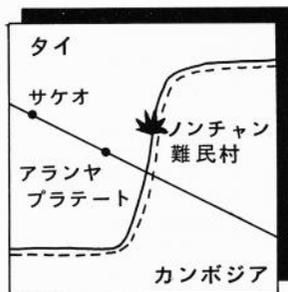
- ノンチャン難民村砲撃事件
- 「金は出すが、人は出さない」援助の矛盾
- UNHCR新聞「難民」から



焼却炉の前にあるクメールの仏像と老人
(カオイダン難民収容所, 82年3月12日)

1982年3月10日

ノンチャン



1982年3月10日午後6時10分、3発のりゅう砲弾がタイ・カンボジア国境線のノンチャン難民村に撃ち込まれた。2, 3発目は村のはずれの原野に着弾したが、最初の砲弾が夕暮時で賑わう村の市場を直撃した。なんの前ぶれもない攻撃であった。

事件の通報をうけた国際赤十字は直ちに救急車を送り、負傷者のうち26名をカオイダン難民収容所の赤十字・日本共同病棟へ、5名をタプラヤのイタリア病棟へ運びこんだ。緊急にサケオの宿舎から呼びだされた2人の日本人医師たちも夜を徹して負傷者の手当てにあたった。

翌11日午前9時、私はカオイダンの病棟で事件を確認した後、ノンチャンに向かったが、現場はせいぜい惨な様相をていしていた。

即死した人たちの死体はそのまま放置されている。サロン姿の女性が3体、そのそばに2つの黒く焼けただれた赤ん坊の死骸、少し離れて10歳前後の少年と老婆が各一体ずつ、計7体。死体は相当傷んでいて、すでにまっ黒にハエがたかっている。

砲弾は市場の路地から4, 5メートル離れたカヤ葺き小屋に落ちたらしく、そこだけ直径1メートル、深さ30センチの大きさで地面が削りとられていた。炊きたてのご飯のつままった鍋、日本製のカンヅメ、アルミのスプーン、フォークなどが散乱している。夕食を囲む直前だったのだろう。

誰かが飛びだした脳みそをビニール袋にいれ、死者にも白布がかけられた。線香の細い煙が幾筋も刺すように熱い日射しの中にゆら

難民村砲撃事件

野中章弘

写真・文

めいている。

死者のうち3人は名前がわからなかった。しかしいずれにせよ、ここでは死者は名前を刻む墓標すらなく埋葬され、朽ちてゆく。

一方、カオイダンに運ばれた負傷者の中からも次々と死者がでていた。

スン・トリー(26歳・女)は砲弾の破片で骨盤を砕かれ、意識不明のまま11日午後1時25分、息を引きとった。彼女の母親は現場で即死、妹だけが生き残った。

死体は病棟地区の入口にある冷蔵庫で1日保管されたあと、翌朝イダン山のすそのの原野にポツンとある小さな焼却炉で焼かれるという。

12日午前9時30分、ノンチャンでの死者たちは、数人の尼僧の短かい読経のあと茶毘に付された。カオイダンに身寄りのないかれらに葬式はない。

結局、この砲撃事件で18人が死亡し40人の人々が傷ついた。たった一発の砲弾がこれだけの悲劇をうむ。

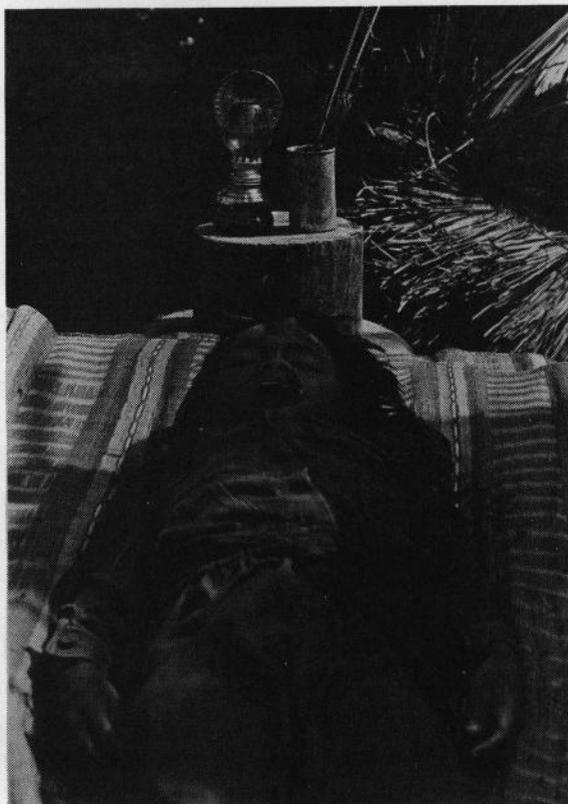
軍事専門家によれば、この砲撃はベトナム軍による105ミリ砲あるいは130ミリ砲のためし撃ちではないかという。飛んできた方向から考えてもまず間違いがない。

だとすれば、彼らの死は一体なんだったのか。これが国境の日常とはいえ

ここではあまりにもたやすく人間の生命が奪われてゆく。

しかし、そのような世界であればこそ、一見無意味に思える死の意味が繰り返し問われ続けねばならない。

それこそが、国境で死んでいった数多くの死者たちが私たちに残した課題ではないだろうか。



即死した10歳の少年
(ノンチャン難民村, 82年3月11日)

「金は出すが、人は出さない」援助の矛盾

伊藤 浄樹

●バスで約12時間揺られて、私たちはタイ北部の町ナンに着いた。ナンはバンコクから約800 kmの山岳地帯の中にある田舎町だ。タイといえば熱帯の暑さを想像するが、10月下旬ともなれば朝晩の冷え込みは厳しい。早晩には霜があり、店前には手袋やジャンパーが並ぶ。私たちは、ここを拠点にバンナムヤオ、ソプトゥアン両キャンプの自動車修理教習所プロジェクトを改善することになった。

タイ北部には4つのラオス山岳民族のキャンプがある。その中のチェンコン、バンナムヤオ、ソプトゥアンで、難民のために自動車・バイクの修理を教えるプロジェクトが行われている。これはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の資金でタイ内務省が行っているものである。ところが実際には授業の内容も乏しく、生徒があまり集まらないということでUNHCR、内務省からJVCにプロジェクトを改善してほしいとの要請があった。これを受けてJVCは8月中に北の3キャンプにある自動車修理教習所の調査を行った。そして、日本人5名タイ人2名のボランティアが10月下旬より2ヶ月間、プロジェクト改善を行うことになった。

●ナンに着いてから私たちは、バンナムヤオ、ソプトゥアン両キャンプの現場責任者であるUNHCRのアメリカ人ニーナ女史に自動車修理教習所の状況を聞いた。

「バンナムヤオの自動車修理教習所では授業らしい授業は行われていません。タイ人教師は、ほとんど生徒は教えず、生徒が勝手にやっている状態です。教材はこわれたままであるのに、月に教材の修理代やガソリン代などの名目で、お金が使われているのです。こういった状態をJVCに改善してほしいのです。しかし、段階をふまえず急なプロジェクト改善をすると、タイ人教師や内務省の面子をつぶしてしまうので、慎重にしてください。ソプトゥアンではバンナムヤオにくらべると相当うまくいっています」とのことだった。彼女は資金の流れを次のように話



してくれた。

UNHCR → ①内務省 → ②ナン県庁 → ③キャンプ内務省事務所 → ④タイ人教師

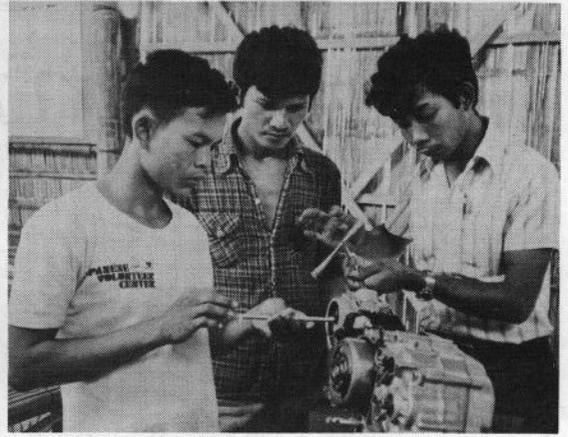
（①～④の段階で資金が消えていくものと思われるが、バンナムヤオにおいては④で消える可能性が高い。
（参）タイ人教師の給料は約2万円

このような問題は、他のキャンプやタイ以外の土地でも少なからず起っている。民間ボランティア団体がプロジェクトを行う場合、限られた予算内でどうやれば有効であるかを考えてプロジェクトを進めていく。しかし、その国の行政機関に資金を渡し、プロジェクトを委託してしまうと多くの場合、予算を毎月使い尽すだけに終わってしまう。

私達はソプトゥアンは教材補助とアドバイス程度にし、バンナムヤオを中心に改善することをUNHCRに話し、同意を得た。

●翌朝、車でバンナムヤオキャンプに向った。車から山の斜面にぎっしり詰った薄茶色の家並が見えてきた。バンナムヤオキャンプである。81年10月の人口は約9,600人、約8割がモン族、その残りは、ラオ族とその他の山岳民族である。

ウボンキャンプ・カオダイキャンプにおいてJVCは、UNHCRの資金で独自に自動車修理教習所のプロジェクトを行っている。(写真はカオイダン。ここではオートバイ、自転車などを教えている)これらのプロジェクトの有効性が認められ、北キャンプの自動車修理教習所プロジェクトの改善がJVCに要請された。



キャンプに着いてまず学校をたずねた。3人いるはずのタイ人教師はだれも来ておらず、数人の生徒らしい人たちが、床の上に放置されているエンジンをいじっているだけであった。教室の隅の机には、使用不能の部品が山積みになっていた。部屋中見わたしても、ひとつとしてまともな教材はなかった。彼らの1人は、「先生はあまり来ません。来ても軍人や近くの人たちの車やバイクを直してアルバイトをしているんです」と言った。

しばらくすると、教師の1人がやって来た。遅れてきたことを全く気にしておらず、他の2人についても知らないという。見せてもらった生徒の出席簿には、実際にはいない生徒の名がぎっしりと書かれ、出欠はとられていなかった。予想していたとはいえこの状況には驚いた。

●翌日、さっそく教師3人とプロジェクトの改善方針について話し合い、プロジェクト改善が始まった。わずか2ヶ月の間にできるだけ有効な対策をたてなければならない。まず、教師たちにはJVCの運営するウボン自動車修理教習所に、学校運営や教え方を学ぶために研修に行ってもらった。その後3人には実技・講義・管理を分担してもらった。

また、この学校では以前はタイ語だけで授業を行っていたが、タイ人と生徒を仲介するアシスタントは、ひとりもいなかった。山岳民族の若者の多くはタイ語を使えるものの、完全に理解できるというわけではない。そこで、私たちはモン人9名ラオス人2名をアシスタント候補として集め、彼らに協力してもらった。

教室の改修、新教材の購入、教材の改良、モン語-英語対照のテキスト作りなどを行ったが、キャンプ内には電気も通っておらず苦労は多かった。手でエンジンを切ったり、テキスト用の紙を総計2万枚以上、手動の輪転機で印刷したりした。また、教材、ガソリン、オイルなどの管理を厳しく行うようにもした。

結果としてプロジェクトの内容は以前よりも高まったが、まだ問題は残っていた。タイ軍人が勝手に校内を出入りしたり、教師が授業中にアルバイトに出たりしていることがしばしばあった。このことを教師たちと、ミーティングをもったり、キャンプ内関係者が集まる会議に申し出たりして、改善に努めたが完全には解決されなかった。

このプロジェクトは、難民の自立のためのものであるということが、タイ人教師、タイ軍人、民間人の中で理解されず、ただ自分達にとって都合のよいものとして3年間続いてきた。

●12月25日。キャンプ関係者全員でクリスマスパーティーが行なわれた。仕事を離れたタイ人教師たちは、陽気で人のいい普通のタイ人であった。考えてみれば、彼らも犠牲者かも知れない。彼らが望んでこの職についたわけでもない。内務省が、ただプロジェクトの形をつくるために技術屋である彼らを集めたのである。

このプロジェクトで起った問題は、大国の多大な援助金を出すだけで責任を果たしたとする姿勢から生れてくるものではないだろうか。そういった援助する側の姿勢が、難民に必要な援助が届くのを防げるばかりか、タイ社会の中にもひずみを作ってしまったのではないだろうか。今、本当に必要とされているのは、資金だけではなく、資金を管理し常にどうすれば有効に使えるかを考え、最大限に難民のために役立て使うことのできる組織や人材なのだと、私は思う。

(いとう じょうじゅ：早大理工学部4年，1980年12月から82年3月まで、主にカオイダン難民キャンプで、自動車修理教習所の運営に従事)

置き忘れたものは…

三橋 玲子

V君ご自慢のフランス系の血をひいた美人のお母さんが、双子の弟たちを抱いて笑っている。彼がラオスから肌身離さず持ってきた写真の一枚だ。

デパートの家具売り場を見ながら「お母さんのベットはもっとずっと大きかった」教育テレビのフランス語講座を見て「お母さんはいつもナイフとフォークを使って食事をしていたし、ワインも飲んでいたよ」。V君は、わずか一年で日常会話には不自由のなくなった上手な日本語で話してくれる。

彼の実家は、首都 ビエンチャンの高級住宅地。隣は日本大使館だった。父親は英語が堪能で、貿易商をしていた。そのためか、彼の言葉からは祖国での豊かな暮らしぶりがうかがえる。「お姉さんは飛行機に乗ったことがあるの」「そう、それじゃ僕と一諸にタイに行こうよ」タイに行って、それから、お父さんに迎えに来てもらう。僕、高校の試験に落ちちゃったら、ラオスに帰ろうかな、日本はもうつまんないから」技術を身につけたいという彼の希望で、自動車整備の専門高校を受験することが決まっていたV君は、受験期の不安感のためか、よくそんなことを言った。

彼が生活する家庭には、全国から定住者のために何かしたいという善意の人々が訪ずれ、寄附金が集まる。彼らが、ごく普通にプレゼントするさまざまな電化製品が、V君の周囲を埋めていく。

この春、V君は無事試験に合格した。入学後は学業のかたわら、近所のお肉屋さんでアルバイトを始め、週一回は空手の塾にも通っている。ラジオ、ウォークマン、カメラやコンピューターゲームを買っては嬉しそうに見せてくれる。最近ではテレビのCMや新聞のチラシを見ては「これはいくら」「これはどこで買えるの」と言

うのが口ぐせだ。多人数でせまい部屋に暮らしているほとんどの定住者たちとくらべて、V君の生活ははるかに恵まれている。その落差のあまりの大きさに私は驚き、同時に一抹の不安も感じる。日々、価値の変わる頼りにならない通貨よりも、物品に換えて財産とするのは彼らが体験から身につけた生きる知恵といえるだろう。しかし、物が氾濫する日本では、そこに落とし穴があり、物欲にとらわれて足をすくわれる危険性もあるように思えるのだ。

今、V君は学校で禁じられているオートバイの免許をとるために、自動車学校に通い始めた。難民という言葉でいい表わされる人たちに対して、悲惨なイメージばかりをいっていた自分に気付いた。彼を見るにつけ、その認識の浅さを思い知らされるようになった。生身の彼らを、「悲惨な難民」という一つのイメージで限定することはできない。定住者はそれぞれ、まったく違った背景や環境を背負って生きている。周囲の人間が、思い込みの同情だけで接することは、彼らにとって幸福なことではない。日本社会で、いつかは彼らも一人立ちしていかなければならない。その時になって、とまどい苦しむのは彼ら自身だ。なんでもいからすぐに物を買いは与える。また、そういう環境を作りだす。それは、日本人自身、物質的豊かさの中で何か大切なものを見失っているせいなのかもしれない。物質的援助もさることながら、どこかに置き忘れてしまった何かをとり戻すための精神的援助が、定住者にとっても、協力する立場にある日本人にも必要とされているのではないだろうか。

(みつはし れいこ：80年7月末から8月までベトナム難民キャンプで、トイレ建設プロジェクトに従事。東京連絡事務所では、他のボランティア団体の交流会を組織中)

南から来た人を迎えて

広島に住む一主婦より

広島は美しい都市である。市内には七つの川が流れ、周囲は山に囲まれ、地形は変化に富んでいる。36年前、原爆によって地獄と化して以来の、重く苦しい歳月を、これらの山や川は無言で受けとめている。

この地に、二年前からはるか南方の国ベトナムからやって来た難民5家族が定住している。20年におよぶ内戦の後、成立した自国の政策にどうしてもついていけず、自由を求めて命からがら逃げてきたのである。外国人、特に東南アジアから来た人々に、ともすれば私達日本人は冷い。私は、ここが彼らの安住の地になるのが心配であった。幸い、理解ある企業主のあたたかい力添えにより、彼らの生活は日一日と安定しつつある。

しかし、言葉の違う異国での苦労は並大抵のものではない。彼らの世話をしている方の話によると、ある母親が出産のため入院した時などは、家に残った小さな子供達の面倒を見なければならず、夜は寂しがないよう同じふとんの中で休み、まるで本当の親子のように過ごしたという。また、御主人の出勤後のある奥さんを訪ねたところ、彼女は一人ぼっちで頭から毛布をかぶり、部屋の中にじっとうずくまっていたという。彼女の場合、御主人と同じ会社に就職が決まってからは、見違えるほど生き生きとして毎日頑張っているそうである。

彼らの希望により、かつてタイ国内の難民キャンプでボランティア活動をしていた人達と、かねてから難民問題に関心を持っていた人々が集まって、小さな語学研修のグループを作った。毎週日曜日の午後、定住者の一室で寺小屋式の勉強が始まった。教える側にとって大切なことは、一時的な興味で参加しないこと、また、自立していく彼らのための助けであって必要以上に彼らの日常生活に立ち入らないこと、日々の慣習の違いも折にふれ教え合って、地元の人々とのつき合いがスムーズにできるように手助けすることであった。彼らは大変熱心で、平日も

夜間に日本語を習いたいと、YMCAの会合室に出かけて行って補習を受けるようになった。

20才になるT君は、YMCAのメンバーが手話を習っていることを知り、自ら学び始めた。このことを知った時、私は目の覚めるような思いがした。彼は、あまり気張った考えからではなく、ごく自然に何かできることを吸収していこう、そして、それが他く人の役に立つのならすばらしい、こんな気持ちからであったようだ。彼は若いし上達も早い。耳の不自由な日本人と、ベトナムの青年との手話による会話は、きっと実り多いものに育つに違いない。

明治以来、広島は全国有数の移民県と言われるほど、海外への移住が盛んに行なわれてきた。彼らもまた、第2次大戦後の祖国の復興のために、決して楽でない生活の中から物資を送り続けたと聞く。そして今、広島は人々の言語に絶する苦しみと努力によって立派に復興した。この広島に、これから新生活を築こうとする人々を南方から迎えて、彼らを失望させることなく、お互いに良いものを出し合って住み易く充実した日々を過ごすことができるよう努力を重ねていきたい。そして、それは明日への希望ともなるだろう。





UNHCR新聞「難民」から

● 資料提供 UNHCR (国連難民高等弁務官事務所)

●オーストリアの ポーランド難民

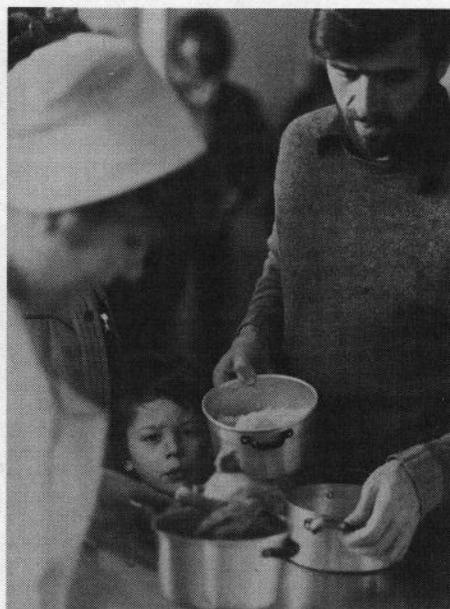
トライスキルヘンはこの地方ではどこにでもあるような、世紀初頭の灰色と黄色の建物から成る兵舎である。ここはその昔、オーストリア皇帝の兵士たち、次いでナチの占領軍、そしてソ連の解放軍が使用していた。今や、過去を捨て去り、人生の改たな出発を決心したポーランド難民のためのキャンプである。

昨年、戒厳令がしかれ、国境が封鎖されたことによって国へ帰れなくなったポーランド人5万人のうち約半数の人々が難民となり、オーストリアや第三国での再定住を希望している。残り的人々は様子を見守って待機している状態だ。またごく一部の人々は、最近ウィーンにやってくる特急ショパン号でワルシャワに帰っていている。

再定住を希望している者の大多数は20才～25才の若い労働者、学生やインテリたちである。彼らは他の「難民」と違って暗闇の中や霧の中を命がけて逃亡してきたわけではなく、特急ショパン号や自家用車でやってきた。

キャンプでの生活は、旅行者のようにはいかないものの、比較的楽である。暖防設備もあり、1人につき2枚の毛布、まくら、シーツ、鍋2つ、ナイフ、フォークとスプーンが支給され、肉やチョコレートも食べられる。しかし、もともと収容人数2000人のところなので180㎡の部屋に100人～120人がいるのもざらで、廊下にまでベッドが遠々と並んでいる。このキャンプにはポーランド人だけでなくルーマニア人、チョコ人、ハンガリー人、チリ人、ウガンダ人、クルド族の難民もいて、あちらこちらで違う言葉が聞こえてくる。背景は様々だが、将来を思い悩み、故郷を思う人々の表情は皆同じだ。

昨年一年で、オーストリア政府は難民のために約5千万ドルを使った。どんな大国にとってもこれは巨額であろう。しかし、オーストリアはトランジ



1982年、トライスキルヘン難民一時保護施設にて
(写真提供 UNHCR)

ットの起点に過ぎず、世界はオーストリアにいる難民の定住受け入れをして、オーストリアの重荷を少しでも軽くしなければならない。

この数万人のポーランド難民は将来の生活の場を捜し求めている。一つ一つの再定住の受け入れは、その数や統計の裏に、1人1人の人間の希望の実現がある。
(1982年2月号より)

●アパルトヘイトの難民たち

南アフリカ共和国は、アパルトヘイト(人種差別政策)の国である。この制度によって圧迫される人々の暴動は絶えない。その中でも1960年、悪名高い*レファレンス制度に反対したデモ体の数百人が殺されたシャープビル大虐殺は、初めての難民の流出をひき起こした。また1976年には、アフリカ人のための劣悪な教育制度を固定化するバンツール教育法を、政府が実施することを決定し、アフリカ人学生の不満が爆発した。打ち続くデモの弾圧により、176人が

殺され、1000人以上が負傷し、数千人が不当に逮捕・拘留され、そして何百人ものアフリカ人学生が、近隣諸国、ボツワナ・スワジランドやレソトに庇護を求めた。現在、このアパルトヘイト制度の犠牲者の数はレソトに11,500人、スワジランドには5,500人、そしてボツワナには300人のアンゴラ人に加えて700人にのぼると推定される。

これらの庇護国は、経済的にも政治的にも発展途上であり、自国の失業問題をかかえながらも、大量の難民を受け入れなければならないのである。

これらの難民の特徴は、大半が学生であることである。彼らは南アフリカ共和国の教育制度の差別に耐えかねてやってきたのだ。そのため彼らが求めるのは安全と食糧と住居、そして学問の機会なのである。UNHCRはこうした学生の奨学金のスポンサーをしている。

庇護国の教育機関や国際社会からの援助で難民たちの教育の場は開けてきた。たとえばレソトでは、当国の大学の20%の席が、そしてスワジランドでは10~15%の席が難民のために開けてある。またアフリカの他の国々、またはヨーロッパやアメリカでの教育の機会を与えられた難民もいる。学校教育の他に職業訓練も強調され、スワジランドでは45万ドルの職業技術訓練所が開設される予定である。ところが、難民たちは、このような直接職業に役立つような訓練よりも、高等教育を受けたい気持ちが強く、目下大きな悩みの種である。

UNHCRは、難民たちの明日を探る一方、現在の彼らの安全も計らなければならない。難民たちのいるボツワナ、スワジランドやレソトの都市地域は南アフリカ共和国との国境に近い。南アフリカ軍が難民たちに対して攻撃を加えることもある。そのためレソトでは、塙で囲んだレセプションセンターが建てられた。また難民たちの大多数は、現地人の中で生活する方がキャンプなど、難民たちが集まっているところよりも安全だと思っている。

このようにUNHCR、難民庇護国などにより懸命な協力が行われているが、現在も政治状況の悪化から、南アフリカからの難民の流出は依然として後をたたない。(1982年6月号より)

※南アフリカ共和国におけるすべてのアフリカ人が常時携帯することを強要されている手帳。携帯者の住所・職業・契約・税金領収書、その他のことが記されている身分証明書。

明日をみつけた娘、 “トラン”

18才になるベトナム人娘トランは、思い悩んだあげくに非合法出国を決意したある日、ホーチミンに停泊中だった「シンガポール2号」に着のみ着のままでしび込んだ。黙って家を出てきた。父や姉のことが気がかりだったが、たとえその動機がどんなに切実で深刻なものであったにせよ、そんな危険な賭けを、あの年老いた父が許してくれるとは思えなかった。

暗く閉ざされた船底の倉庫の片隅で、飲まず食わずのまま、じっと息をひそめていた彼女は、二日後、疲労と空腹で憔悴しきっているところを船長に発見された。彼女は小さな部屋に移されて、船長の監視下におかれた。申訳程度に設けられた小さな部屋の小さな窓から、毎日心配気に声をかけ見舞ってくれたのはインド人機関士のウィルソンであった。やがて2人は恋に落ち、船長の立ち会いのもとに形ばかりの結婚式を挙げた。あの倉庫の片隅で、恐怖におびえ、絶望に打ちひしがれていた少女は、その時はじめて希望の片りんを垣間見たような気がした。

船がシンガポールに着くと、トランはすでに第三国の定住を待つ1000人のポートピープルがいるシンガポールのトランジットセンターにいき、インド定住を希望した。ウィルソンは海上からインド当局に新婦の再定住受け入れを頼んでいる。

トランはシンガポールで、ウィルソンは船上で、ニューデリーからの幸福を告げる知らせを一日千秋の思いで待っている。「インドに行ったらウィルソンと一諸に暮したい。落ちついたら法律の勉強もしたいのです」とトランは希望に瞳を輝かせて語った。

(1982年5月号より)



原文英語・編集部訳

恒産なくして恒心なし

丹羽秀夫

私は縁あって、バンコク事務所の会計指導に5月8日から1週間行ってきました。

とかく任意団体の経理は雑なのですが、印象ではよくできていました。けれども、JVCが今まで築いてきた、そしてこれからさらに大きくしていかなければならない社会の信頼のことを思えば、なお一層の向上が必要です。そんなことから、いくつかの会計上の指導や提案をさせていただいた次第です。

JVCのそもそもの起こりを伺えば、人間なら誰しも持つ平和や幸福への願い、そして愛、から生じたと言ってよいでしょう。その熱い想いが渦となり、まわりの人々の心を動かしつつより強く、より大きく育ってきたのだと思います。

これからも、この原点を忘れず、育てたいと思うのですが、一つだけ心配事があります。

また、あいつだノ

また、花壇を荒しやがった。

せっかくみんなで手入れをし、

かわいいつぼみがついたのに。

みんな、楽しみにしてたのに。

難民の救援という活動は、非常に政治的であり、活動が成功すればする程、政治権力の下で左右されてしまう危険があります。サンタクロースのように優しげな姿をした食糧や医療品の緊急援助でさえ、政治の道具であるのです。例えば、アメリカはポーランド紛争に際し、大量の物資援助を行ないましたが、この裏には反共政策という政治があるのです。

ですから、JVCにも、ある時はこわい顔をして、またある時は優しい顔をして、政治が近づいて来ることを心に留めなければなりません。

「北風と太陽」の話をご存知でしょう。旅人が意地悪な北風に対しては、意地になってオーバーを押さえていたように、JVCも頑張り続

けることができると信じます。けれども、太陽に対してはどうでしょう。もし、それが悪魔の化神という正体がわからないとしたら……。

こんな怪物のような政治に負けず、また誘惑もされずに、純粋な心を持ち続け、真の平和が世界を被うまで活動を続けるためにはどうしたらよいでしょう。これは、皆で考えなければなりません。

必要十分な解答を示すことは今の私にはできません。けれども、必要条件の一つだけを述べれば、「恒産なくして恒心なし」ということです。

つまり、良心を保って生きるためには、ある程度の財産が必要だ、ということです。これはJVCにも言えることだと思います。

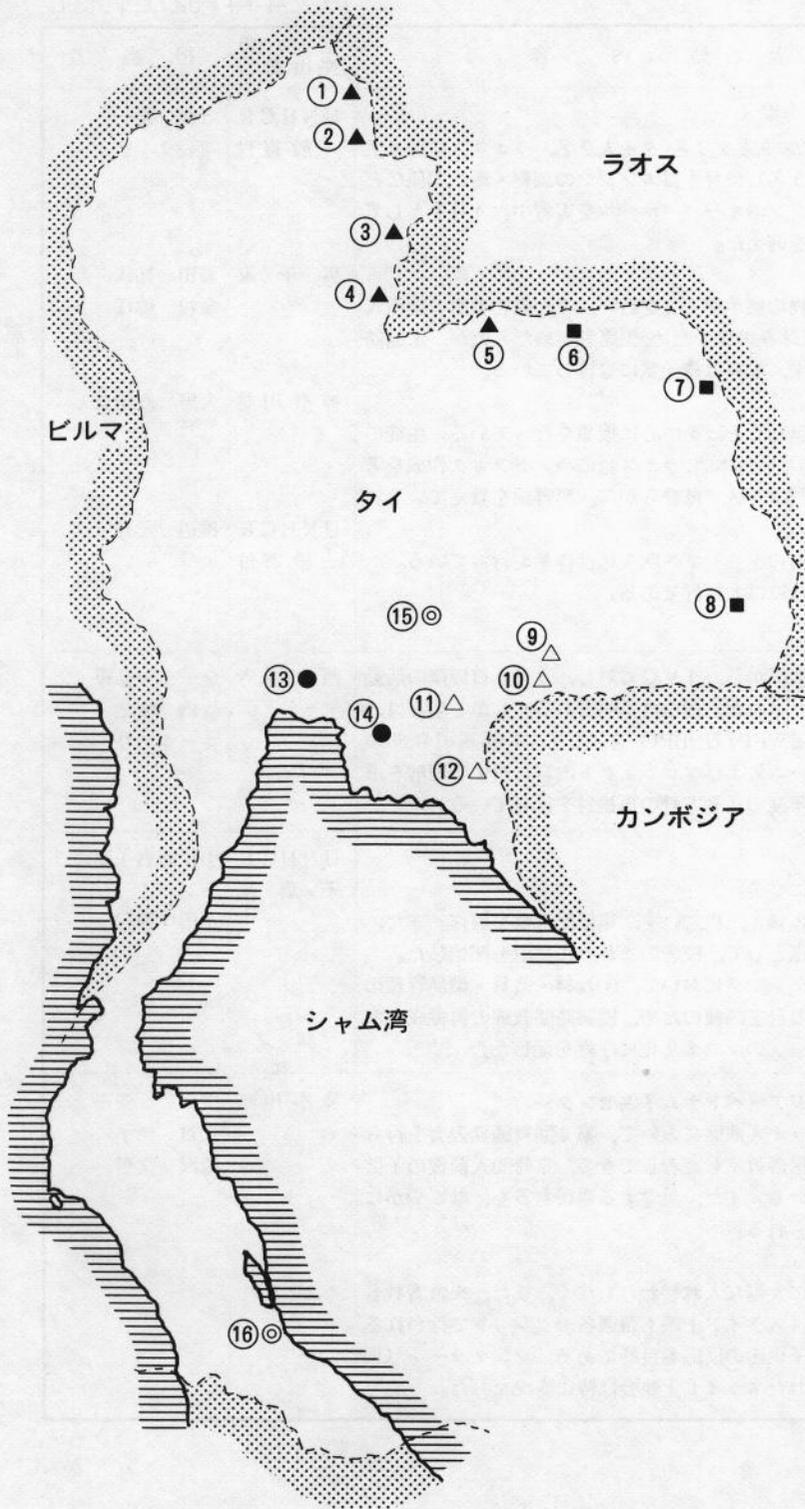
優秀なボランティアひとりひとりも財産です。でもそれぞれがバラバラでは、できることも限られるところから、JVCという組織ができたと言えます。この組織もまた財産です。そしてさらに現実的に言えば、この組織を維持していくことぐらい独力でできるように、志を理解して下さる人たちから資金を集められるようにしておくことも必要な財産と言えます。

残念ながら、今のところ、この最後に述べた財産は少々足りないようです。

(にわ ひでお：公認会計士82年4月から東京連絡事務所の会計指導を担当。また最近、JVC全体の会計システムを作製中。24才)



タイの難民キャンプ人口（4月30日現在）



①	チェンコム	6,233 人
②	チェンカム	22
③	バンナムヤオ	10,908
④	ソプトゥアン	7,521
⑤	バンビナイ	32,762
⑥	ノンカーイ	2,368
⑦	バンナポ	12,564
⑧	ウボン	10,976
⑨	ルムプク	855
⑩	カオイダン	44,671
⑪	バンケーン	30,956
⑫	カンブット	2,558
⑬	バンコク	510
⑭	パナニコム	17,945
⑮	シキウ	5,281
⑯	ソンクラ	321

カンボジア人	△	92,217
ラオス人	□	30,699
山岳民族	▲	55,991
ベトナム人	◎	7,544
		186,451

(タイ国最高軍司令部調べ)

JVCプロジェクト

1982年4月27日現在

活動地名	活動内容	活動費 拠出者名	担当者
ウ ボ ン (ラオス人キャンプ)	自動車整備学校 生徒数177名。スタッフ9名(タイ人2名, ラオス人教師4名 アシスタント3名)。11月生はエンジンの調整・電気関係など 2月生はエンジンのオーバーホールを実習中。4月生として 72名の新入生を迎えた。	UNHCR 一般寄付	寺島 正一 ユ タ ナ
	織物学校 4月15日に織物の展示即売会を行い, また織物教室の開所式 も行った。正月休みの後のため, 欠席者が多かったが, 家庭訪 問を行った結果, 現在は皆元気に登校している。	裏 千 家	森田 知代 金村 悦江
	日本語学校 中級クラスは話しことばを中心に授業を行っている。生徒の 要求もあり, 新しい日本語, ラオス語のハンドブック作成を考 えている。入門クラスではひらがな, 形容詞を教えている。	神奈 川県	大野 直樹※
	図書館 本を朗読したものをテープへ吹き込む作業を行っている。 これは子供たちには大好評である。 ハンディクラフト	UNHCR 一般寄付	磯辺 元秀
タイ・カンボジア 国境	タイ軍最高司令部から, JVCに対し, 4月1日以降の活動 禁止が言われた。理由は不明である。しかし現在は, 国際機関であるWFP/UNBRO を通して, 軍最高司令部の JVC国境チームおよびプロジェクト内容に対する理解を求 めながら, 82年度の活動方針の再検討を行っている。	西本 願 寺	金子 一弘※ 竹内 俊之 ニール・リー
カ オ イ ダ ン (カンボジア人キャ ンプ)	自動車整備学校 2月生4月末に卒業。 生徒数の増加に備え, 机, いす, 電気配線盤を製作。また, 環境整備の一環として, 校舎のまわりに植樹を開始した。 スタッフミーティングにおいて, ①教材・道具・備品管理の 強化。②教師の自主訓練のため, 授業時間教課の再編成を取 り上げ, スタッフのマンネリ化に注意を促した。	UNHCR 千 葉 県	小松崎恵子※ トンデイ 小田中勝己
パ ナ ッ ニ コ ム (第3国定住待ちの 人達の一時収容施 設)	ラオス・カンボジア・ベトナム子供センター カンボジア・ラオス地区において, 第4回舞踊発表会を行っ た。ラオス地区の教室も定着してきて, 常時20人前後の子供 達が集まっている。また, 見学する難民も多く, なごやかな 授業風景がみられる。 図書活動 難民スタッフの大幅な入れ替わりもなく, また, 来館者数も 安定している。スライド上映も毎週各セッションで行われる ようになり, 子供達の反応も良好である。ソクラーン(旧 正月)に行われたスライド上映会は特に盛況だった。	神奈 川県	穴戸 望※ 大貫 玲子 滝沢 文男

JVCプロジェクト

読者からの手紙

▶私は友人から難民の話を書き、ただかわいそうだけというだけではなく、自分も何かしなくてはと思い募金しました。ほんのわずかだけど、役に立ててください。一日も早く、祖国に帰れますように！

国境線に在留している障害者の人達にも、補助具や車いすなどが届けられるといいと思う。T.Sさん

▶JVCは、Tさんを通して知りました。そしてTさんの姿にひかれて、私も、何か役立てたらと思い参加しました。

私自身、先天性脳性マヒで、身体に障害をもつ者ですが、現在、稲城リハビリで、トレーニングをえています。

ほんのわずかですが、難民の障害者のため、募金させてもらいました。 I.Yさん

T&E, バックナンバー

号	内 容	価格(発行日)
1	JVCとは/日本の中の「難民」たち	¥ 150 (80.12)
2	難民救援活動の2年目を迎えて	200 (81. 1)
3	海をこえた友情/アメリカ難民通信	300 (81. 2)
4	オーストラリアの避難民	300 (81. 3)
5	西崎さん追悼/ウボンキャンプ紹介	300 (81. 5)
6	難民条約/キャンプでの井戸掘り	300 (81. 6)
7	タイ・カンボジア国境/難民キャンプ・スラムの声	300 (81. 7)
8	統合される難民キャンプ/ノンカーイキャンプ日本語学校	300 (81. 8)
9	西崎憲司記念自動車整備士学校開校/カンボジアの現状	300 (81. 9)
10.11	山の難民「モン」を訪ねて/水をつくる	300 (81.11)
12	「国境なき医療団」に聞く/草の根グループをつくりましょう	300 (81.12)
13	日本のインドシナ難民/今、行き場のない22万6千人は	300 (82. 3)
14	シンガポールの難民キャンプレポート/ボランティアさまざま	300 (32. 4)
15	救援の目で見えたカンボジア/カンボジア国内の救援団体一覧表	300 (82. 5)

T&E バックナンバー購入方法

。お支払いは、郵便振替(東京3-54186)か現金書留、あるいは切手(ただし100円以下の切手で500円まで)でお願いします。送料は別です。



JVC NEWS

7月16日から7月25日、写真展「インドシナからやってきた子どもたち」が、渋谷区、東京都児童会館で開催されました。ひきつづき、来年の3月末日まで全国各地で開催いたします。各地のJVCOB、そして、難民問題に関心のある方に、写真展開催のご協力をお願いいたします。

開催予定日	開催予定地
7月28日～8月6日	岐阜(瑞浪)
8月6日～8月7日	埼玉(川口)
8月13日～8月15日	茨城(水戸)
8月20日～8月22日	三重(四日市)
8月22日	岐阜(岐阜)
8月26日～9月1日	静岡(浜松)
9月5日	長崎(佐世保)
9月7日～9月9日	岡山(津山)
9月12日～9月15日	愛知(岡崎)
9月19日～9月26日	長崎(佐世保)
9月25日～9月26日	茨城(結城)
9月29日～10日前半	大阪(大阪)
10月4日～10月6日	大阪(関西大)
10月6日～10月13日	宮城(仙台)
10月12日～10月17日	宮崎(宮崎)
10月20日～10月26日	福島(二本松)
10月23日～10月30日	北海道(札幌)
11月3日～11月7日	東京(早稲田大)
11月14日	神奈川(平塚)
11月17日～11月25日	京都(京都)
11月25日～11月30日	東京(杉並)
11月28日	大阪(東大阪)
1月5日～1月9日	和歌山(和歌山)

詳しいことはJVC東京連絡事務所まで。

会 計 報 告

事業費内訳

(単位パーツ)

キャンプ名	プロジェクトの内訳	金額
パナニコム	日本語学校, 教育レクリエーション	57,156 ⁷⁵
クロントゥーイ	自動車整備学校, 職業訓練, 図書館	18,413 ⁷⁵
ウボン	日本語学校, 自動車整備学校	27,351 ²⁵
国境		12,164
カオイダン	自動車整備学校	41,115
給水プロジェクト		46,182 ²⁵
北キャンプ		6,530
キエンコン	伝統医療	2,810 ²⁵
バンピナイ		474
バンコク・ボランティア・ホーム	4月分家賃および電気・水道代	5,542
バンコク事務所	諸経費	117,584
合計		335,306

4月会計報告 (82.4.1 ~ 82.4.30)

(単位パーツ, 1パーツ約10円)

内 訳	収入の部	支出の部	残 高
前月繰越金			6,599,240 ⁹⁵
寄付送金	322,106 ⁷¹		
雑収入	317 ⁵⁰		
受取利息	160 ⁷⁵		
仮払金		171,061 ⁵⁰	
東京連絡事務所		50,000	
諸経費		335,306	
合計	322,638 ⁹⁶	556,367 ⁵⁰	6,365,511 ⁹⁶

現金および預金残高 6,365,511⁹¹



JVCとは

Japanese Volunteer Center は1980年2月、タイの首都バンコクで設立された民間救援団体です。

1979年の暮れのインドシナ難民の大量流出を、きっかけに、日本から救援に駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり、現在の組織の原形ができあがりました。

当初はタイ・カンボジア国境への物質輸送など、欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが、現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により、独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは、難民、そしてそれと同様の窮境にある人々に対し、できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが、タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプやバンコクのスラム街において活動を続けています。

また今年に入ってからは、カンボジア国内での井戸掘り調査やシンガポールでの活動を始めました。

東京連絡事務所は、こうした活動の情報、人材、資金を現地と結ぶ日本の窓口として機能しています。

「Trial & Error」年間購読申し込み方法

一般購読者 1口 3,000円 (1冊送付)
 賛助購読者 1口 10,000円 (4冊送付)

JVCでは

難民救援活動をより充実したものにすするため、以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

インドシナ難民救援募金 (5月小計 40,950円)

東京連絡事務所を窓口にしてバンコクに送られ、各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。

ボランティア募金 (5月小計 5,285円)

現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。

送金方法

住所、氏名、募金種目名を必ず明記の上、下記の郵便口座にお振り込みください。

口座番号：東京 9-27495

加入者名：JVC 東京連絡事務所

※ 会計の都合上、「Trial & Error」の購読申し込みとは別にご送金くださるようお願いいたします。

郵便口座番号 東京 3-54186

住所、氏名、年齢、職業を明記の上、購読開始月をお書き添え下さい。

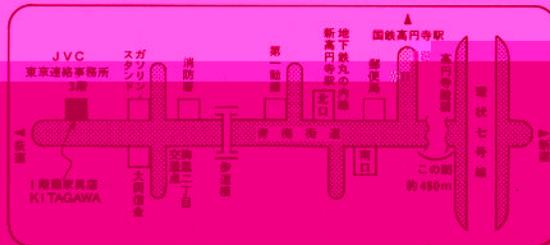


本部 Japanese Volunteer Center
 6/3 Jomtijsathit Road
 Bangkok, Thailand
 TEL 286-4857

発行所 IVC東京連絡事務所
 〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5
 三笠ビル3F 最寄駅 丸の内線新高円寺駅
 TEL 03(316)3253

昭和57年7月20日発行
 20日発行

発行人 税田 芳三
 編集人 大久保 俊彦
 撮影 野中 章弘
 紙撮影 加藤 明彦
 印刷所 株ベスト・プリンティング



定価 1部300円

昭和
 毎月
 発行
 表紙
 裏表
 印